

領域「環境」と英国 EYFS の評価の比較について

横井 一之・斉藤 公彦*・金森 由華**・千田 隆弘***・小野 克志****

The Comparison of the Evaluation Method in the Case of Japanese and the UK's EYFS

Kazuyuki YOKOI, Kimihiko SAITO, Yuka KANAMORI, Takahiro SENDA
and Katsushi ONO

We assess every childcare lesson. The curriculum is also assessed regularly and improved. An annual teaching curriculum, a monthly teaching one and weekly teaching one are evaluated each term. Thus, we focus not only on children's development but also on the plans, preferences and teachers' help in assessment.

A Japanese kindergarten sends children's assessment to their elementary school for a elementary school in order to understand each of them. The UK has the same system. We search different points between both countries.

1. はじめに

保育の評価は計画に基づき実施する毎に行われる。教育課程や保育課程は定期的に評価し改善され、年間指導計画、期間指導計画、月間指導計画、週間指導計画については、その期間毎に評価される。このように、保育の評価というと子どもの発達のみを対象とするのではなく、計画、環境設定、保育者の援助等を総合的に対象とする。

本稿では上級の学校等へ進級するときに提出する評価について論じる。具体的には、本邦では幼稚園幼児指導要録¹⁾、保育所児童保育要録²⁾、認定こども園こども要録³⁾を示す。一方、英国⁴⁾ではドキュメンテーション・アセスメントとスケール・アセスメントである。

初めに2章で英国スケール・アセスメントについて説明し、本邦の幼稚園でもこの評価方法を試みた様子を述べる。3章では日本の幼稚園での記録について説明する。

なお、1章を斉藤、2章を横井、小野、千田、3章と4章考察を斉藤、金森が担当する。

2. 英国のスケール・アセスメント⁴⁾について

前述のドキュメンテーション・アセスメントは Formative assessment を、スケール・

*名古屋ひまわり幼稚園 **愛知淑徳大学 ***、****名古屋文化学園保育専門学校

アセスメントは Summative assessment を埋橋玲子さんが意識したものである。英国で4歳児が進級するとき、義務教育諸学校へ提出する一人ひとりの学びの成果の記録である。日本で言えば、幼稚園幼児指導要録にあたる。スケール・アセスメントの1分野に「問題解決、推理、計算」分野がある。この分野はさらに「ラベルとしての数と計数」（以後ラベルと略す）、「計算」、「形、空間、計測」（以後形と略す）の3項目に分かれる。本節では、本邦の幼稚園教師がこの3項目の評価を実施できるかを検討した。

2・1. 「問題解決、推理、計算」分野のスケール・アセスメント項目

表1 スケール・アセスメント（英国 EYFS、埋橋さん論文より抜粋）

問題解決・推理・計算			
(段階)	ラベルとしての数と計数	計算	形・空間・計測
3	身の回りのものを6つまで正しく数える。	5つまでなら、そのうち1多いか少ないかがわかる。	簡単な立体や絵やパターンの形を言う。
4	順番に数が言える。	二つのグループを比べるのに足し算と関連付ける。	単純なパターンについて話し、認め、まねる。
5	1から9までわかる。	取り去るのに引き算と関連付ける。	日常語で位置が示せる。
6	身の回りのものを10まで正しく数える。	実用的な活動や話し合いの中で引いたり足したり語彙を使い始める。	形が決まっていて平らなものであれば「まる」とか「～より大きい」と形や大きさの言葉を使う。
7	10までの順番がわかる。	1から10までのうちなら、そのうち1つ多いか少ないがわかる。	形を比べて「～より大きい」「～より小さい」「～より重い」「～より軽い」という言葉を使う。(訳注:比較級の使用)
8	実際の問題を解決するのに算数的な考えや方法を使う。	実際的な問題を解決するのに算数的な考えや方法を使う。	実際的な問題を解決するのに算数的な考えや方法を使う。
9	20までわかり、数え、並べ、書き、使える。	数のつながりを思い出すのに、足し算や引き算を使う。	形の固定した立体や平面的なものについて算数的な言葉で表す。

当調査に該当する部分のみを埋橋さんの論文より抜粋すると表1のようである。

2・2. 調査の方法

7クラスの各担任教師が、上記のスケール・アセスメント表により、各子どもについて段階を決定した。

①調査時期 2011. 11. 14. ～11. 18.

②調査対象児 名古屋市H幼稚園年中組7クラスから64名(男女不明)

- a. 4歳9ヶ月児(2007. 2. 生まれ) 11名
- b. 5歳児(2006. 11. 生まれ) 23名
- c. 5歳3ヶ月児(2006. 8. 生まれ) 10名
- d. 5歳6ヶ月児(2006. 5. 生まれ) 20名

2・3. 結果

表2 スケール結果(最大値、最小値、平均値)

	人数	ラベル			計算			形		
		最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値
4歳9ヶ月児	11	9	7	7.18	7	3	5.64	7	3	5.91
5歳児	23	9	7	7.39	9	4	6.61	8	5	6.74
5歳3ヶ月児	10	9	7	7.40	9	4	6.01	7	5	6.40
5歳6ヶ月児	20	9	7	8.00	9	4	6.25	9	5	6.75
総計	64	9	7	7.55	9	3	6.25	9	3	6.55

年齢による発達を考慮し、被験者として4歳9ヶ月児11名、5歳児23名、5歳3ヶ月児10名、5歳6ヶ月児20名、計64名を選び、担任に表1の一覧表を用いて子ども毎に3項目について段階を決定してもらった。担任により基準がずれるといけないので、検査前に金森が各担任へ一覧表の説明を行った。ちなみに、生活年齢は4歳9ヶ月を100とすると以後105、111、116となるが、年齢による差は顕著でない。

平均値は高い順に、「ラベルとしての数と計数」の項目が7.55、「形・空間・計測」が6.55、「計算」が6.25である。H幼稚園の子どもは、計算や図形の理解より、数学的に考えることが得意である。

以上のように、英国の子どもを対象としたスケール・アセスメントだが、本邦の子どもへの評価にも有効であることが分かった。

3. 日本の幼稚園での記録について

本章では、イギリスの評価システムに類似するものとして、日本における指導要録について論じる。幼児教育という点から主に幼稚園に注目して「幼稚園幼児指導要録」について特性と取り扱われ方について論じる。本邦では教育の連続性を考慮し、幼稚園幼児指導要録、保育所児童保育要録、認定こども園こども要録等、幼児教育・保育の指導を記録している。学校教育法施行規則(第24条)「校長は、その学校に在学する児童等の指導要録を作成しなければならない」に基づき、幼稚園では指導要録の作成及び保存、小学校への抄本または写しの送付が法的に義務付けられている。幼

幼稚園幼児指導要録は数字による評価ではなく、著しい発達のみられた項目に印をつけたり、文章表現によるものが主流である。文部科学省の「幼稚園幼児指導要録」様式の参考例¹⁾では数字による評価ではなく文章の評価になっている。文部科学省から発行された幼稚園教育要領解説では「反省や評価は幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である」とされている。子どもの育ちを尺度で画一的に評価することは、学校教育法（第 22 条）に定められた、本国の幼児教育の目標である「成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する」とは少し異なるようだ。幼稚園教育要領「第 1 章総則」に「幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人ひとりの特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。」との趣旨を生かすような評価の方法をとっている。幼稚園教育要領が法的拘束力を持つことから明らかである。

文部科学省「幼稚園幼児指導要録」様式の参考例「指導に関する記録」では「指導の重点等」欄、「指導上参考となる事項」欄がある。参考様式の例は「指導上の重点等」は「学年の重点」欄と「個人の重点」欄に分けられている。「学年の重点」欄は各幼稚園の教育課程に基づき、長期の見通しを立て年度初めに記入する。「個人の重点」欄は「一年間を振り返って、当該幼児の指導について特に重視してきた点」を記入するとある。「指導上参考となる事項」欄は、幼稚園教育要領に示された「各領域のねらいを視点として、当該幼児の発達の実情から向上が著しいと思われるもの。一人ひとりの幼児の発達の過程を『指導の重点等』に照らし合わせて指導の記録をとり、それを他の幼児と比較することなく個人内評価で捉える」ということをしている。幼稚園幼児指導要録に、著しい発達のみられた項目に印をつける形式の評価を取り入れている幼稚園もある。画一的な指標をもとに行われるものではなく、個人内での評価の意味合いが強いものである。幼稚園幼児指導要録は子どもの発達と指導の過程、一人ひとりの子どもに通園している「幼稚園の教育課程が反映されているか」などを理解する役目が強い。

数量・図形に関する具体的な記述の例としては「数字の関心があり、自由遊びでは身の回りの物の数を数え、自由画帳に数字を書いて数字を覚えようとしている。」「たしざんが得意なことで自信を持って園生活に臨んでいた。引き算についても興味があるようである。今後の指導につなげていきたい。」というような表現になる。そのため、例えば英国スケール・アセスメント⁴⁾にある「10まで順番がわかる」というような表現は避けられがちである。

4. 考察

英国では保育学級、保育学校、保育所、プレイグループ、レセプションクラス、チャイルドマインダー、チルドレンセンターなどの幼児教育施設から、義務教育段階の初等学校幼稚部や私立学校のプリプレバトリースクールへ入学するときに、ドキュメンテーション・アセスメントとスケール・アセスメントの提出が義務付けられるようになった。本稿では、スケール・アセスメントを本邦の幼稚園児に当てはめて、この評価法を実施することは可能であることを確認した。

では、本邦ではスケール・アセスメントの様な評価が何故用いられないかを検討したい。

周知の通り、幼稚園教育要領には幼稚園教育の基本として、

- (1) 幼児の主体的な活動を促す。
- (2) 幼児の自発的な活動である遊びを通して、5領域を総合的に指導する。
- (3) 幼児一人ひとりの特性に応じて、発達の課題に即して指導する。

ことが掲げられている。

表1のスケール・アセスメントには、数量や図形のついでの3項目について記述してあるのみであるが、原本は6領域13項目について、それが9段階に評価内容が示されている。このスケール表が目的として一人歩きすることはないと思うが、これらの内容が目的となると、到達目標でなく、方向目標を掲げる幼稚園教育に反することになる。本末転倒である。

幼児は総合的な活動である遊びを通して、5領域のねらいが達成されるべきであるが、スケール表を全面に掲げると、領域の視点に立った保育内容に重点が置かれるようになる。たとえば、小学校以上の学習内容を例にあげると、テストの形式になりやすい問題項目は、たびたび出題される。長期間その状態が続くと、テストに出やすい学習内容ほど取り上げられやすくなる。幼児の遊びについて当てはめれば、遊びの指導の中で、保育者がスケールにある項目に子どもを誘導するようなことがあると危険である。

幼児期の発達の特性の1つは、個人差が大きいことである。周囲に配慮を怠らず、周囲を気にする日本人にとって、「このスケール表によるとこの子どもはこの段階である」と評価するのは、幼稚園教育には馴染まないと考えられる。

以上、3つの点から本邦ではスケール・アセスメントは適していない。

幼稚園幼児指導要録の例は、文部科学省のホームページから印刷できるが、その中へ学籍に関する記録と指導に関する記録を記入することとなる。本稿で取り上げているのは、指導に関する記録のうち「指導上参考となる事項」の内容で、この要録では文章表記である。特に領域にこだわることなく、複数の領域にまたがって記入してもかまわない。

保育所児童保育要録は、保育所保育指針解説書²⁾の小学校との連携の部分に、様式の参考例が載っている。教育（発達援助）に関わる事項の記入方法は、おおむね幼稚園幼児指導要録と同じだと思われるが、記入欄が年齢や学年毎になっていない。この要録は、前回の保育所保育指針の改訂、法令化に伴い、要録の提出が義務化されて準備されたもので、幼稚園幼児指導要録に比べて簡便になっている。

認定こども園こども要録は、幼稚園幼児指導要録にほぼ準じている。

ところで、本邦の保育所では児童票³⁾があり、その添付資料として「発達の記録」がある。具体的には未満児用はそのことの形成月齢を記入するようになっている。領域「環境」に関わる項目としては、

0歳児用「手を伸ばしてつかもうとする。」

1歳児用「いじる、つまむ、たたく、ころがすなど手や指を使う遊びを楽しむ。」

2歳児用「水、砂、土、紙などの素材に触れて楽しむ。」

とある。

3歳以上の幼児用は、5月、10月、2月にチェックすることになっており、「援助が必要」「しよ
うとする」「する」のどれかにチェックする。領域「環境」に関わる項目としては、

3歳児用

「自分の物と人の物の区別ができ、自分の持ち物などの始末ができる。」

「身近な草花や動物などに関心をもつ。」

「身近な物に触れたり、集めたり、並べたりして遊ぶ。」

4歳児用

「生活の中で、物を数えたり、比べたり、順番が分かったりする。」

「身近な動植物に親しみ、喜んで世話をしようとする。」

5歳児用

「身近な動植物に親しみをもち、進んで世話をして命の尊さに気づく。」

「身近の物事について知り、興味や関心をもつ。」

とある。

かつて三重県S市公立保育園長をなさっていた方に何うと、「この発達の記録を見れば、その子どもがどの様に発達、成長してきたかがよく理解できる」と明言なさる。

少し乱暴な言い方になるかもしれないが、本邦でも昭和以前には子どもの発達状況を数値化することが流行したことがあると聞く。平成元年の幼稚園教育要領以後は、この章に記述したように、一人ひとりの個性を重んずる保育が浸透した結果として、評価は個々の成長をふまえて、文章記述されることが主となった。

英国では、かつては個々の幼児施設が独自の方針で保育することを是としてきた。ところが、2008年のEYFS実践指導書が発行されて以後、保育機関も含むすべての教育機関を評価するOfstedが設置されたこともあり、英国の教育改革はまだまだ目が離せない状態である。本邦の幼児教育同様に、今後も英国の幼児教育の動向に注目していきたい。

<引用文献、参考文献>

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 2008
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針解説書」フレーベル館 2008
- 3) 文部科学省・厚生労働省共同通達「認定こども園こども要録について（通知）」2009.1.29.
<http://www.youho.go.jp/data2/090129kodomoyoroku.pdf>(2011.12.2.)
- 4) 埋橋玲子「幼児教育・保育における「自己評価」の検討」四天王寺大学紀要第49号 2010
- 5) 三重県保育協議会「児童票の手引き」三重県保育協議会 2011